

第4期第6回松本市地域づくり市民委員会 会議要旨

開催日時 平成30年10月26日（金曜日） 午後3時から午後5時まで

開催場所 松本市役所本庁舎別棟 3階 大会議室

出席者（敬称略）

委員 廣瀬豊（委員長）、堀内正雄（副委員長）、大澤好市、木次由美子、草深邦子、倉澤聡、小林修、近藤博志、神保孝彦、角野園恵、降旗都子、古幡安志、宮下鉄、宮林孝子
（欠席 赤沼留美子、佐藤佳子、松澤幹夫）

事務局 地域づくり課 課長 西澤広幸、協働推進担当課長 田村明彦、
課長補佐 廣田圭男、協働推進担当 主査 小川敏由、
地域づくり担当 係長 宮下拓也、主事 白澤隆文

1 開会

（進行 廣瀬委員長）

2 会議事項（議長 廣瀬委員長）

(1) 地域と市民活動団体の協働について

ア 前回の意見交換内容の確認

- ・委員長による資料説明

イ 第3回市民活動推進委員会の内容の報告

事務局から10月22日に開催された同委員会での協議内容を報告（報告者 宮下）

<事例発表>

- ・本委員会委員でもある佐藤委員による「暮らしと地域再生プロジェクト」の事例発表（地域との協働のきっかけやハードル、成功理由の視点から）
- ・NPO法人てくてく理事長である桑原委員による補足（主に障害者ボランティアの立場から、啓発の大切さ＝知らないとお互いにバリアを張ってしまうことや、市民活動団体が行政よりは当事者に近い距離感で、解決はできなくてもそのきっかけを作ることはできることなど）

<意見交換>

- ・地域福祉に関しては、地域では問題の当事者に対し、踏み込んでよいかどうかわからない。
- ・市民活動団体には踏み込める専門家がいる。地域がそれを知っていることが大事
- ・地域団体と市民活動団体の接点は「特殊技術」
- ・市民活動団体のすごさは、「こんなことをやっている人がいたのか」と思うほど、様々な専門に特化して、楽しんで人の役に立とうという人がいること。これを町

会役員などが知っていたらよい。

- ・地域には困り事をどこに相談するか知識がない。市として団体リスト、サポートセンターのウェブサイトでのキーワード検索対応などの仕組みを作る必要があるのではないか。
- ・リストは、各団体の出来ることがわかるものが必要。現状のNPO法の分類と団体名だけでは何をお願いできるのかわからない。
- ・そうした仕組みに加えて、関係者をつなぐきっかけを作るコーディネーターが必要。

ウ 意見交換

(降旗委員)

- ・市民活動団体と地域をつなぐ仕組みづくり、団体リストや検索システムなどは、すぐに前向きに動き出すのか。

(事務局 田村協働推進担当課長)

- ・現在掲載している情報について、分類し直したり検索の仕組みを作ることは、すぐには困難な部分もあるが、より良い情報発信ができるよう研究していきたい。

(小林委員)

- ・地域（町会）の役員の多くは、輪番制で、1，2年で役員が変わっていく。
- ・町会は、決まった枠組みの中で行う活動がほとんど。つまり、経常的、最低限必要な業務・行事を、確実にこなしていくことが主となり、役員任期が終われば解放される意識が共有されている。したがって、見直しや新規の創造的取り組みは難しい。
- ・また、町会の取り組みには、各地域に共通する営み・課題といった全市的に共通の事柄が多く、市役所に担当課や全市的な団体事務局が明確に存在し、情報や支援を受けやすく、行政と密接に関わっている。
- ・一方、市民活動団体のメンバーは、特定のテーマに沿った事柄について興味があり、勉強熱心で自主的、持続的な人たちの集りで、行政とのつながりは弱い。
- ・このように、両者は性格、目的、人材が非常に違う。これをマッチングしていくことは難しい。その必要性があるのかということも慎重に考えなければならない。
- ・一般論として手をつないでいくのは難しく、具体的なテーマ、必要性が生じないと、協調に向かわないと思われる。
- ・前回の赤沼委員の事例発表を聞いて感じたことだが、出来れば複数の市民活動団体のメンバーが、町会役員を引き受けたり、町会役員と親しかったりでいろいろな会合で日常的に繋がっていると、信頼性・身近性などが自然に形成され、連携が取れていく可能性が強い。

(廣瀬委員長)

- ・今の小林委員の発言で気付かされたことは、町会運営の時間的流れと市民活動

団体の時間的流れの違い。お互いの計画と実行のための動きがうまく重ならな
いと、すぐに出来ず、実施が1年先になってしまうのではないかと。

- ・日常的なつながりも非常に大事な点だと思う。
- ・そうした中でも、双方のメリットになることもあるだろうし、どうやって上手
につないでいくかということも考えていく必要がある。

(降旗委員)

- ・市民活動団体にいる専門家の力を町会で欲しいという場面が出て来るはず。今
はそのための情報を市民が知る術がない。検索システムなどは時間がかかるか
もしれないが、紙ベースでもよいので、情報を作って欲しい。また、その情報
をコーディネートするのは、地域づくりセンター長や公民館主事の役割だと思
う。

(田村協働推進担当課長)

- ・現時点では、市ホームページの地域情報一覧に、色々な団体の一覧や指導者の
名簿を掲載している。それを印刷してお渡しすることは可能。
- ・地域で困り事があった場合には、地域づくりセンターへ相談していただくこと
があると思うが、そこから市民活動サポートセンターへつないでいくようなこ
とを、センター長にも働きかけていきたい。

(堀内副委員長)

- ・町会の立場から言うと、市にお願いすれば必要な情報はもらえるが、あらかじ
め、紙ベースであっても一覧表があれば、お互いに手間が省けて便利だと感じ
る。特に、敬老会であがたの森で活動しているグループに余興をお願いする場
合などには助かる。

(大澤委員)

- ・中央地区のような中心市街地と四賀地区のような農村部では状況が異なる。
- ・四賀地区には、市街地に比べて市民活動団体は少なく、社協など、いずれも上
部団体に属している。
- ・町会長は、インターネットでの情報検索を行う人はあまりいない。前回委員会
の意見にもある町会リーダーの考え方で情報の入り方が違うというのは、その
とおり。
- ・必要性が生じて市民活動団体を調べても、対象となる団体は我々の地域にはな
い、というジレンマもある。

(廣瀬委員長)

- ・コーディネートしてくれる人によってうまくつながっていくこともあるのでは
ないか。
- ・実はこの話題は、次の地域づくり推進体制というテーマにもつながっているの
ではないか。組織自体のあり方もそうだし、参加する人や団体のことなども含
めて、同じような課題として捉えていける面もあると思うので、次のテーマに
もつなげて考えていきたい。

(小林委員)

- ・東京大学の牧野研究室が、町会のコミュニティ活動を新しいものに変えていくという目的の事業で、市内の町会に調査に入ることを聞いている。自分の町会もヒアリングを受けることになっているが、その概要は、「住民自治を基盤とした社会システム構築事業（自分を磨き気が付けば地域づくり事業）」を進めていこうというもの。
- ・「自分が楽しんでやっていたら、自分が磨かれて、気が付いたらそれが地域づくりになっていて、町会活動につながっている」ということを期待しているのではないかと思うが、面白い切り口だと感じる。楽しく地域で活動していたら、町会を改めて創っていくこと、形骸化が進んでいる町会や各種団体の活動を楽しく変えていくことにつながるのであれば、面白い事業だと思う。次のテーマである地域づくり推進体制にもつながるのではないか。

(廣瀬委員長)

- ・調査の中で何か参考になることがあれば、教えていただきたい。
- ・先日、松本ではないが、町会で実施するイルミネーションについて、学生に関わってほしいと相談に来た町会がある。すぐに準備に取り掛からなければならない状況だったので、「今年は希望する学生を募りはするが、もう少し長期的に町会や組織と関わっていけるような学生を育てていきたいとも思うし、あまり性急に進めないほうがよいのではないか」というような話をした事例がある。最初の小林委員の話にもあったが、計画や流れということも大事で、そういった時間的などころにどうやってうまく乗せて行くかということも、専門家としての視点になる。
- ・その相談者は、親から引き継いでやっているとのことで、継続する意義や難しさ、それを広げたり若い人につないでいくという課題も併せ持った事例という印象を感じた。そういうところに、市民活動団体が関わって支えていくこともできるのではないか。

(2) 地域づくり推進体制について

ア 説明

(事務局 宮下)

- ・資料について説明

(廣瀬委員長)

- ・グループワークの方法について説明

イ グループワークの結果（各グループの発表内容）

(ア) 参加のきっかけづくり

<グループ アー１>

- ・町会になかなか参画できない人を巻き込むためには、「緩やかな集会」が有効ではないか。明確な目的を考えず、お茶会、飲み会など気軽な集まりから意見交

換をスタートできる。

- ・町会になかなか参画できない子育て世代も、自分の興味のある行事なら出ることが、経験からわかった。
- ・子育て世代を町会にどう取り込むかという視点からは、学校が地域にどう関わるかが大事。清水地区では授業の一環でまち歩きを行っている。子供のうちに地域に興味を持てば、大人になってからも地域を大切にする。
- ・社会事情で地域全体で考えなければならない問題が生じて、皆で考える機会ができた。その時に立ち上げたグループが、町会役員とは別の実働部隊として、自分達の地域を真剣に考えるという下地を守り続け、今でもつながって、好循環している。

<グループ アー 2>

- ・災害、高齢になったときの不安など、自分に関わることが生じると地域を意識する。
- ・町会と小学生を結びつけるなど、当事者として色々な人を巻き込むことが必要。
- ・リーダーが大切だが、同時にリーダーをフォローする人達も大切。スポーツの行事の慰労会などでは、そのような人たちを見つけやすいのではないか。
- ・地域団体の役員などのOBの活躍できる場があれば、活動が広がる。

(イ) ニーズの変化に対応できる地域組織の運営

<グループ イー 1>

- ・ニーズの変化を町会組織では感じていない。そのために組織が硬直化し、担い手がみつからない。
- ・地域に関わろうとする人は極めて少数。例えば認知症などは、患者を家族に持つか、自分自身がそれを心配する年齢になった人以外は、自分のこととして考えていない。住民の共通認識を高めながら、お互いに暖かく見守る地域社会を作る必要がある。
- ・地域課題を共有する以前の問題として、人と人とのつながりが無い。日常の挨拶が当たり前に行われる地域社会を作ることが大事
- ・町会関係団体の役員の適切な任期についても議論したが、3年くらいが良いとか毎年交代した方が良いとか、様々な意見が出た。
- ・ニーズの変化に対応するというよりも、暮らしている人の意見や求めていることにアクセスできるかどうか重要。そのためには住民同士の井戸端会議が日常にあるかどうかが一番大事。それがないので、ニーズが把握できない。
- ・町会役員は大変というイメージがあったり、町会自体が理解されていないので、何が大事なのかを分かりやすく伝えていくことも必要。

<グループ イー 2>

- ・町会役員の負担軽減策としては、婦人会等を上手く使って組織の効率化を図ったり（四賀のそば打ちの事例）、責任の分散、予算の分散による負担軽減も必要
- ・輪番制は地区によっては採用できないところもある。

- ・役員の担い手としては、女性の参画を進める必要がある。女性の細やかさやネットワークを生かすべき。
- ・年長者が若い世代の意見を受け入れながら上手に引き継いでいく。
- ・町会長が一人で抱え込まなくて済むよう、補佐するメンバーが必要
- ・相談してもらえる関係づくりが大切
- ・ニーズをキャッチしたら情報を共有し、相談していくことが大事。それによりニーズの循環が生まれる。
- ・義理と人情が大切

(3) 今後のスケジュールについて

ア 事務局説明

(事務局 宮下)

- ・資料に基づき説明

イ 質疑等

なし

(4) その他

ア 「平成 30 年度 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い」について

(ア) 事務局説明

(事務局 白澤)

- ・資料により集会の説明と協力依頼

(イ) 質疑等

なし

イ 前回委員会の会議録のホームページ掲載について

(ア) 事務局説明

(事務局 宮下)

- ・前回議事録のホームページ掲載について説明

(イ) 質疑等

なし

5 閉会

(以上)